

必要性を感じる新聞活用の在り方

指定校1年次 上松町立上松中学校 室岡 裕幸

(1) 本校の新聞活用（NIE）の現状

本校生徒の家庭での新聞購読率は6割である。また、日常的に新聞に目を通している生徒は少なく、新聞の読み方が分からない、学習内容を新聞にまとめようとしてもレイアウトや書き方が分からないという生徒の声もある。また、インターネットの普及、スマートフォン所持率の上昇に伴い、生徒は適切に情報を選択し、それをもとに洞察することによって自身の確固たる意見を形成するという経験が不足していると思われる。インターネット上の「まとめサイト」をまさに自分の意見のように主張するような「情報のつまみぐい」状態が広まっている現状を変えることは学校の責任であると感じている。そこでまずは、教科学習で新聞を取り入れるとともに、学校司書協力のもと、生徒がいつでも新聞に触れられるスペースの確保を行い、新聞が生徒にとって身近なものになるような環境の醸成が必要ではないかと考えた。

(2) 実践のねらい（育てたい力）

本校生徒は、一問一答的な問いかけについては積極的に挙手ができる。一方で、自分の考えを記述すること、仲間に伝えることについては消極的な面も見られる。また、「書ける生徒」「伝えられる生徒」など一部の生徒が出した意見に頼ってしまい、それを受け「自分ができた気」になってしまう傾向も見受けられる。このような生徒の姿が思考力・判断力・表現力の育成につながっていないのではないかと感じるようになってきた。2017年度NIE指定校に選定されたことを契機に、生徒には新聞を通して自身に必要な情報に気づき、それを適切に使い、表現するメディアリテラシー・情報リテラシーを育成したい。そのために、指定校1年目の本年度は「新聞ありき」ではなく、まずは日常生活の中で新聞を通して社会事象に関心を持ち、そこから感じたことをまとめる力、文字を書く力を高めることをねらいとした。

(3) 研究の概要

①新聞コーナーの設置

本校は読書が好きな生徒が多く、図書館に足を運ぶ生徒も非常に多い。そこで、校内で新聞に触れられる場所として、図書館に数種類の全国紙や地方紙を展示するコーナーを設けた。また、学校司書の協力により、図書館前、図書館内に生徒が興味のもてるようなベタ記事をスクラップし、掲示した。このような取り組みにより、当初は興味を示さず、教科の課題提出のために新聞を利用していた生徒が、多くの社会事象が自分に関係していたり、身近なものであることに気づいたりすることで、徐々にこんなことを知りたい、調べたいと、新聞が追究のための興味の湧くツールとして変化してきた。

【新聞コーナー】



【ベタ記事掲示スペース】



【職員室への出張掲示】



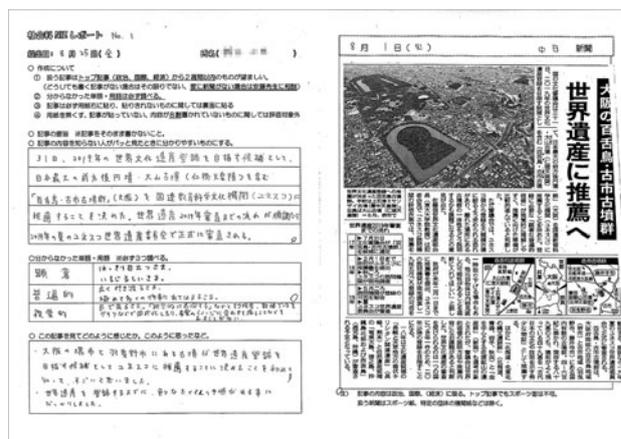
また、職員も新聞に興味をもってほしいと願い、職員室には教育関連記事、地域に関する新聞のスクラップを掲示することで、普段は新聞に目を通す時間の少ない職員が空き時間に目を通す姿も見られるようになってきた。

②新聞スクラップ・レポートの実施

社会科では1週間の全学年共通の課題として新聞スクラップ・レポートを行っている。まず、興味がある記事を新聞コーナーから選びスクラップし、

- 1 その記事の要旨のまとめ
- 2 語句調べ
- 3 根拠をもった感想の記入を行っている。

まだまだ選ぶ記事に偏りはあるが、興味のあることを更に深く知り、「次はこんな記事を調べたい」という意欲につながってきた。



③新聞コラムの活用

国語科では新聞コラムを書き写し、そこから自身の疑問を記述している。実践の前半では、5W1Hのうち、「なぜ」「どうして」に答えられることは生徒にとって困難であることが分かってきた。そこで後半は「いつ」「誰が」「どのくらい」「どうなる」の追究しやすい疑問の設定を大切にして取り組むように指導をした。定期テストにも新聞コラムを活用し、「この記事からこういった疑問が作り出されるか」等を出題し、生徒が疑問をもつ姿勢の確認をした。

(4) 研究授業

1 単元名 「日本の諸地域 ～ 中部地方を中核に横のつながりを考える ～」

2 単元設定の理由

従来「日本の諸地域」の学習活動は考察の場面を設定こそしてきたが、九州、中国四国、近畿…と学習がぶつ切りになってしまい、どうしても各地域のつながりや類似点、相違点をとらえにくいものになっていた。そこで、「中部地方」を日本の諸地域を学ぶ際の中核として学び、他地域との「横のつながり」を感じられるような思考の土台をつくりたい。例えば中部の農業→○○ 東北の農業→□□ といったぶつ切りではなく、「中部の気候は○○だったが、東北は□□だ。標高が高く、冷涼な気候で中部は高原野菜を抑制栽培で育てていたな。東北はどうだろう。気候と農業のつながりはあるのかな。」というように生徒が自然と考えられるようにしたい。

本時では自然環境と産業の昔ながらのつながりを考えた生徒が、新聞スクラップから見えてきた「中部の産業の今」について班ごとにテーマを決め、授業を行ったあとに海外とのつながりある産業についての新たな認識をもち、SDの考えから中部地方の「今後」について自分なりに「どうしていきべきか・どんなことが必要か」生徒が表現できるようにしたい。

新聞は道の駅に焦点をあて、学習してきたことをもとに地域を盛り上げるプランを個人、ペアと提案した生徒の認識を大きく変える資料として用いる。

木曾地域は過疎問題が深刻である。一時的な解決方法ではなく持続可能な発展の観点から観光としての道の駅から新しい産業の創出、これからの産業のあるべき姿を考えるにあたり「中山間地の自動運転車の実証実験」「防災としての拠点」の記事を用いることは生徒の新しい視点を生むのに最適ではないかと考える。

3 単元の目標

主目標 ① 自然環境が産業と結びついている事を理解する。

② 産業の変化や他地域との関わりを、中部地方を例にして学び、新しい地域としてのあり方や、持続可能な地域のあり方をそれぞれが考察し、まとめることができる。

4 具体目標

A:社会的事象への関心・意欲・態度	B:社会的な思考・判断・表現	C:資料活用の技能	D:社会的事象への知識・理解
中部地方の産業について興味をもち、自分なりの視点で今後どのようなことが中部地方の産業に必要か、意欲と根拠をもって自分の考えを書いている。	1 雨温図と農作物の最適な環境をまとめた資料、既習の日本の気候の内容を関連させ、自分なりの答えを適切に表現している。 2 地図資料から交通網が整備されていることに気づき、産業や観光の発展の背景に他地域との結びつきがあることを表現している。	1 トヨタ自動車のHPから自分のまとめ作業に必要な情報を選び、分かったことをまとめている。 2 新聞スクラップから中部地方の産業の現状を分析し、分かったことをまとめている。 3 学習内容をふまえて自分なりの視点で中部地方がどのような地方なのかまとめている。	降水量や気温と農業の関連性、北陸地方の課題とその解決方法について理解している。

5 単元展開 (全6時間)

時	学習活動	学習問題 (課題)・生徒の意識	教師の指導および支援	評価
単元を貫く問い：中部地方はどのような地方と言えるだろう。				
1	雨温図の読み取り、地形のとらえから農業・産業との結びつきを考える。	<p>地場産業が北陸で発達している理由を考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・冬は農業がなかなかできないから家でできることを探したからじゃないかな。 ・雪が利用できたからじゃないかな。 <p>北陸・中央高地・東海のそれぞれの地方でどのような産業が行われているのか、雨温図をもとに考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・降水量や温度は産業に密接に関わっているな。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 雨温図と農業の写真、作物の最も適した栽培環境の資料を提示し、複数の資料から答えを考えさせる。 	B 1 D
2	豊田市で自動車産業が盛んになった理由を予想立て、資料から学ぶ。	<p>豊田市が「世界のTOYOTA」となることができた理由を考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海が近いし、輸出に便利だったからじゃないかな。 ・人が沢山いたからじゃないかな。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 世界に誇る企業に成長した理由について予想を立てさせる。 ○ トヨタ自動車株式会社のHP (一部抜粋)を読み取り、まとめ、仲間に発表をするように促す。 	C 1
3	中部地方と他地域の関わりについて、歴史的観点、交通の観点から考える。	<p>中部地方と他の地域はどのようなものを通して、どうやってつながっているのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・奈良井宿や妻籠宿では多くの外国人観光客の人がいたし、観光業で世界とつながっているな。 ・地図を見ると空港ができていて、人もモノも飛行機で世界へ運ばれていくと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 歴史的価値をもつものを通して外国とのつながりがあることを理解する。またそれが自分の身近にあることを改めて意識できるように支援する。 ○ 地図帳から高速道路、空港が整備され、他地域とつながりやすい環境ができていていることを理解させる。 	B 2
4	グループで中部の産業の「今」を考える。	<p>新聞スクラップからグループごとにまとめた中部地方の産業の「今」を他のグループに発表しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自動車産業も盛んだけど、現在は航空機 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各グループの発表、発表内容をまとめる時間をとり、各グループが違った視点でまとめたことを理解させる。 	C 2

		産業も盛んになっているよ。 ・歴史的な文化財も注目を浴びていて観光業も盛んだ。		
5 (本時)	中部の産業の「これから」のあり方を考える。	中部の産業の「これから」を提案しよう～道の駅の役割と新しい地域のあり方～ ・木曾は人口が少ないし、お店も少ない。山に囲まれた環境を活かして観光業を盛んにして人を呼んだらいいと思う。 ・環境に配慮した産業が伸びてきているから燃費のいい車専門のディーラーと合体したらいいんじゃないかな。	○ 前時のグループ発表から学んだことから中部の産業は今後どうなっていくのか予想立てを行い、新しい新聞資料等をもとに中部地方の産業のあり方を「道の駅」に焦点を絞り考えられるようにする。	A
6	単元を貫く問いについてまとめを行う。	今までの学習内容をもとに、単元を貫く問いに答えよう。 ・今までは気候や環境の適応するような産業中心だった気がするけど、交通網の整備や人々の努力で幅広い産業を行うことができるようになったし、これからは世界とつながりをもちながら発展していける地方だ。	○ 学習内容をもとに文章でまとめるように指示する。 ○ 今までの学習で使用した資料を一覧にして提示する。	C 3

6 本時案

(1) 主眼 新聞スクラップから中部地方の産業の「今」をグループで発表し合い、意見をまとめた生徒が、これからの産業のあり方を考える場面で、道の駅の取り組みや役割を知ることを通して、中部地方の産業のあり方を自分の暮らす地域を基準に考え、記述することができる。

(2) 本時の位置 (全6時間中の第5時)

〈前時〉グループごと行ってきた新聞スクラップから中部地方の産業の「今」を発表し合った。

〈次時〉今までの学習内容をふまえて単元を貫く問いに答え、全体で共有する。

(3) 本時の留意点

- ・今までの学習内容をふまえて、根拠のある考えをもてるように呼びかける。(○○だから□□)
- ・考えを深める場面ではグループではなく、ペアで行うよう指示する。



(4) 展開

段階	学習活動	生徒の意識	○教師の指導・支援・ 評価	時間
導入	1 前時の学習を振り返り、中部地方の産業の「今後」を予想しよう。	<ul style="list-style-type: none"> 中部地方では伝統的な産業が行われていたな。 最近では先端産業を行う地域もあったな。 	<ul style="list-style-type: none"> ○前時のグループ発表からまとめたことを共有し、中部の産業の「今」を改めて意識する。 	10
		予想立て：中部の産業は今後どんなことが必要か？どんなことが大切か？		
		<ul style="list-style-type: none"> TOYOTAの学習のときにあったように、環境に配慮したり、エコが重視されてくると思う。 地域に根ざした産業が増えてきているから、利益もそうだけど、働く場を増やして行かないといけない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○振り返ったことをもとに中部地方の産業の今後を予想させる。 ○根拠をもった予想になるよう、支援を行う。 	
展開	2 予想をふまえ、中部地方の産業のこれからを提案しよう。 3 ペアで意見を深め、根拠をもって発表しよう。	学習課題：上松を盛り上げる「道の駅」のプランを提案しよう。 <ul style="list-style-type: none"> ただ地域の農産物を売るだけでは駄目だと思う。安心や安全をPRできなくてはいけないな。 地元の魅力と観光をあわせた道の駅にしたいな。 現代の人にあった郷土料理とかがあったら面白い。 人が来やすい場所にしなくちゃいけないな。 〇〇さんはそう考えていたんだ！自分の意見も聞いて欲しいな。2人の意見を合わせたら地域を盛り上げるプランができそうだな。 儲けよりも地域の存続を大事にした産業が大事だな。 	<ul style="list-style-type: none"> ○考える視点は農産物を出荷する生産者などに限らず、第一次から第五次といった様々な視点から考えるよう指導する。 ○道の駅の役割についての資料提示を行う。 ○新聞資料の提示で実際の道の駅の取り組みにふれる。 ○ペアでお互いの意見を認め合いながら根拠をもった提案・発表になるように机間指導を行う。 	30
まとめ	4 中部の産業はこれからどうしていくべきだろうか。	<ul style="list-style-type: none"> 産業には「これをやるべき」という答えはないと思う。地域の実情や特色を生かしたり、新しい産業の形を常に考えて行っていくべきだ。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 中部地方の産業について今後どんなことが必要になってくるか、自分の考えを根拠をもって記述しているか。 </div>	10

(5) 実証の観点

- ① 前時のグループ学習を生かし、中部地方の産業にこれから必要なことを考えたことは学習課題に見通しをもって取り組む姿勢につながったか。
- ② 道の駅を資料として個人、ペアでプランを考えたことは、中部地方の「産業のこれから」を生徒が意識することにつながったか。

(6) 課題とまとめ

NIE指定校1年次の実証を終え感じたことは「新聞に対する考え方に改革が必要」ということである。以前は恥ずかしながら「新聞を使えさえすれば自然と読解力が高まる、語彙力が高まる、思考力・判断力が高まる」という一種の新聞万能論が自分自身の中にあつたように思う。そのよう

な状態で研究が始まり、蓋を開けてみれば生徒が新聞を読めない、内容をつかめないのオンパレードであることに気づいた。つまり、「見方」「考え方」「捉え方」など、生徒が新聞で学ぶ上での土台を教師が築いておかななくてはならないということを改めて実感した。あくまで新聞はツールの一つであり、それを使う教師側が「生徒に丸投げ」状態では生徒の力の育成にはつなげてこない。これから生徒にはどんな力が求められているかが明確であれば生徒は主体的に学習をしていく。そのような生徒の周りには学習をする手段として当たり前のように新聞があるという環境をこの1年間目指してきた。

生徒が分からない言葉をインターネットで検索すればすぐにその答えが見つかる。追究する問題があっても記述したものの根拠を問われれば「ネットに載っていたから」と自分の意見をもたない生徒は少なくない。「新聞の中には様々な情報が織り交ぜられていて、それを読み込みながら生徒は自分たちに必要な情報を探したり、情報と情報をつなぎ、自分の今までの経験を継ぎ足しながら新しい意見を形成し、伝えられる」というのは最終的な目標である。あくまで部分的なインターネット情報に対して新聞は全体的な情報であり、用いる場面によってそれぞれ一長一短がある。それを適切に使い分け、最終目標の達成を目指していくべきである。本年度の実践のように生徒が新聞と向き合う場面が国語科、社会科に限定されるようでは明らかに不十分であり、目標の達成は難しい。2年目の実践では「〇〇科だから新聞は使えない」という早計な考え方は捨て、県下の先生方に学びながら、教科の枠をこえ、あらゆる場面で新聞の可能性を探っていかななくてはいけないと感じている。